

共想法談話のテーマと修辞機能の関連についての分析

田中 弥生
国立国語研究所
yayoi@ninjal.ac.jp

小磯 花絵
国立国語研究所
koiso@ninjal.ac.jp

大武 美保子
理化学研究所
mihoko.otake@riken.jp

概要

本発表は、高齢者の会話支援手法「共想法」のテーマに基づく談話を、修辞機能分析の分類法によって分析し、テーマと修辞機能の関連を検討したものである。先行研究の分析結果を、より整備されたデータによって確認した。「共想法」を構成する「話題提供」パート(独話)と「質疑応答」パート(会話)の分析から、テーマに共通する修辞機能がある一方でテーマに依存する修辞機能もあること、テーマの特徴は「質疑応答」より「話題提供」において強く見られることが明らかになった。

1 はじめに

本発表は、高齢者の会話支援手法「共想法」のテーマに基づいて語られる談話を、修辞機能分析の分類法によって分析し、テーマと修辞機能の関連を検討したものである。共想法は、(1)あらかじめ設定されたテーマに沿って、自身で準備した写真やイラストとともに話題を数人の高齢者が持ち寄り、(2)参加者全員のもち時間を均等に決めて、話題提供する時間(独話)と、質疑応答する時間(会話)に分けるという2つのルールに沿って「話す」「聞く」「質問する」「答える」のバランスをとりながら行われる[1]。

先行研究では、共想法のテーマによって多用される修辞機能が異なることを明らかにした[2, 3]。また、同一テーマであっても「話題提供」パートと「質疑応答」パートでは異なる特徴があることや、さらにテーマやパートによらない個人差があることも明らかになっている。しかし、先行研究では分析データの参加者のバランスが十分に図られておらず参加者の影響が排除されていないという問題があった。そこで本研究では、参加者のバランスを考慮したデータを対象に、テーマと修辞機能の関係を明らかにすることを目的とする。

これまで「修辞ユニット分析」[4, 5]の分類法に

よって様々な談話の分析を行い、目的や話題内容、状況による、脱文脈化程度の様相の検討を行ってきた[6, 7, 8]が、本研究では、「修辞機能分析」¹⁾の分類法を用いる。修辞という語は隠喩などの技巧や技術などの意味合いで用いられるが、本研究では、我々が話したり書いたりする際に、意識的にせよ無意識的にせよ、表現を選び、その結果として生じる機能を修辞機能と考える。修辞機能分析によって、修辞機能とともに脱文脈化指数が明らかになる。文脈や脱文脈という用語は研究分野によって使われる意味が異なるが、本研究では脱文脈化度を、コミュニケーションが行われている「今ここ」の時空とその発話内容との時間的・空間的距離の程度、とする。

2 分析対象と分析方法

2.1 分析対象

本発表では、固定された1グループ4名のメンバーによる3テーマの合計72分のデータを用いて、先行研究の結果を確認することとした。参加者は1つのテーマにつき2枚の写真(2つの話題)を準備して話す。1テーマに2×4名、合計8つの話題があり、3テーマで合計24の話題が本発表の分析対象となっている。「話題提供」パートは1つの話題1分で、参加者は2分の間に続けて2つの話題を話す²⁾。参加者4名の「話題提供」が終わると「質疑応答」(1つの話題が2分、2つで合計4分)が行われる。

本研究の実験全体では、1グループ4名で6グループ合計24名の参加があり³⁾、会話は12テーマで1回ずつ全12回行われた。このデータは、共想法が参加者の認知機能に与える影響を検証するために実施されたランダム化対照群付き比較試験を通じ

1) 修辞ユニット分析を日本語文法の枠組みで検討し修正を加えたもので、現在手順書を作成中である。

2) 基本的に1つの話題が1分であるが、今回のデータの中に2つの話題の時間配分がうまくいかなかったと思われるケースが見られた。

3) 欠席の場合は代替メンバーが参加した。

て得られたものである。参加者は、共想法に参加する介入群と、共想法が開催されるのと同じ頻度で実験会場に通所するのみの対照群とにランダムに分けられた。介入群参加者の共想法における会話を文字起こししたデータを分析した。介入群の実験条件は同一で、対照群の実験条件を雑談に参加することとした場合の検証結果については、文献 [9] に報告されている。

2.2 分析方法

修辞機能分析⁴⁾の分類法によって、1. 分析単位となるメッセージ(概ね節)に分割してその種類から分析対象を特定し、2. 発話機能、時間要素、空間要素を認定し、その組み合わせから、3. 修辞機能の特定と脱文脈化指数の確認を行う。

2.3 分析対象の特定

分析単位の「メッセージ」は、概ね節に相当し、「主節」(単文と主節)、「並列」(主節以外で節の順番を変更することが可能な並列節、従属度の低い従属節)、「従属」(従属度の高い従属節)、「定型句類」(相槌や定型句、述部がなく復元ができないものや挨拶など)の4種類に分類する。基本的に「主節」と「並列」をこの後の分析対象とする。

2.4 発話機能・時間要素・空間要素の認定

「主節」及び「並列」と認定されたメッセージについて、発話機能(提言・命題)・時間要素(述部の時制:現在・過去・未来意志的・未来非意志的・仮定・習慣恒久)・空間要素(述部に対する主体や主題:参加・状況内・状況外・定義)を認定する。表1に示したように、これらの組み合わせから、修辞機能と脱文脈化指数が特定される。時間要素は「今」からの時間的距離を、空間要素は「ここ・わたし」からの空間的距離を示す。今ここわたしに近い修辞機能【行動】の脱文脈化指数が[1]で最も低く、空間的にも時間的にも遠い【一般化】[14]が最も高い。

以下に分類例を示す。

- 1) まあ、あの、普段、私、大体出かけるときは腕時計してますんで、
〔発話機能:命題&時間要素:習慣・恒久(大体出かける時は腕時計してますんで)&空間要素:参加(私)] → 【自己記述】[07]

4) 修辞ユニット分析 [4, 5] を日本語文法の枠組みで修正したもので、現在手順書を作成中である。

表1 発話機能・時間要素・空間要素からの修辞機能と脱文脈化指数の特定

定義	↑ 高空間的距離のレベル ↓ 低						一般化 14
状況外	報告 09	状況外回想 10	予測 11	推量 12	説明 13		
状況内		状況内回想 03	状況内予想 05	状況内推測 06	観測 08		
参加	行動 01	実況 02	計画 04		自己記述 07		
空間要素	← 低 ← 時間的距離のレベル → 高						
時間要素		現在	過去	未来意志的	未来非意志的	仮定	習慣・恒久
発話機能	提言	命題					

- 2) まあ、あの、きょうは腕時計を初めて外したような形になりますけど、

〔発話機能:命題&時間要素:現在(きょうは・・・外したような形になります)&空間要素:参加(φ=私)]⁵⁾ → 【実況】[02]

- 3) ま、これから、だ、だんだん慣れていきたいと思います。

〔発話機能:命題&時間要素:未来意志的(慣れていきたい)&空間要素:参加(φ=私)] → 【計画】[04]

2名の作業者によってアノテーションを行い、判断が分かれたものは筆者の1人が決定した。

2.5 予想される特徴

それぞれのテーマから予想される特徴は次のとおりである。テーマ「好きなもの」は個人の嗜好に関わる話題のため空間的距離のレベルが低い修辞機能が用いられるのに対し、テーマ「近所の名所」は一般的な話題のため脱文脈化度の高い修辞機能が用いられることが予想される。またテーマ「新しく始めること」は、個人的な計画であれば【計画】[04]が用いられるが、現在から先への話題のため「今」から離れて時間的距離のレベルが高い修辞機能が用いられることも予想できる。

3 分析結果

表2は、3つのテーマの「話題提供」と「質疑応答」のパート別の修辞機能の出現度数である。

テーマと修辞機能との関係を調べるために、パートごとに多重対応分析を行った⁶⁾。分析にはRの

5) φ= 省略されている語を復元している。
6) 出現頻度が10以下でほとんど出現しない修辞機能は除外した。

表2 各テーマの修辞機能と脱文脈化指数の出現

	好きなもの		近所の名所		新しく始めること	
	話題提供	質疑応答	話題提供	質疑応答	話題提供	質疑応答
一般化 14	2	4	0	0	0	0
説明 13	25	123	37	166	23	179
推量 12	1	1	0	0	0	2
予測 11	0	1	3	0	4	2
状況外回想 10	1	10	21	27	2	9
報告 09	0	7	2	5	0	5
観測 08	31	58	15	53	18	45
自己記述 07	40	55	7	37	24	86
状況内推測 06	0	0	0	0	1	1
状況内予想 05	0	1	0	0	0	1
計画 04	5	10	2	1	17	11
状況内回想 03	10	20	11	6	25	28
実況 02	4	13	1	4	2	14
行動 01	0	0	0	0	0	0

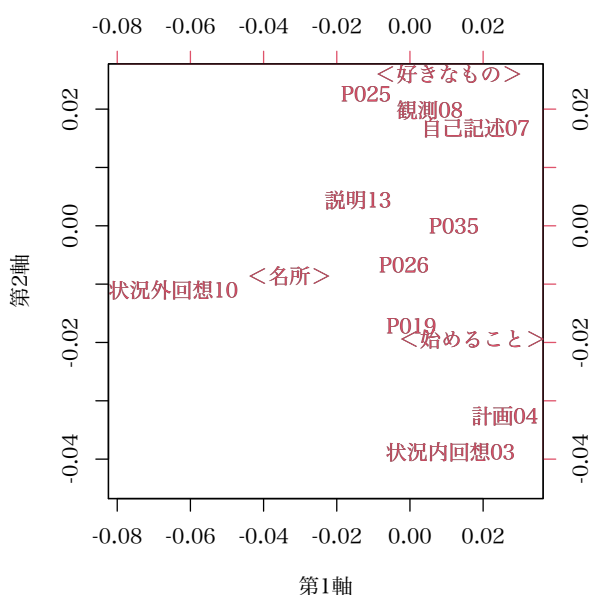


図1 「話題提供」の修辞機能の多重化対応分析結果 (図ではテーマを略して<名所>のように表示)

mca 関数を用いた。「話題提供」パートの結果を図1に、「質疑応答」パートの結果を図2に示す。

図1から「話題提供」における特徴として次のことがわかる。

- 3つのテーマのほぼ中心に【説明】[13]が位置しており、【説明】[13]がいずれのテーマとも共起しやすい。
- テーマ「好きなもの」は【自己記述】[07]と【観測】[08]が共起しやすい。
- テーマ「近所の名所」では【状況外回想】[10]が共起しやすい。
- テーマ「新しく始めること」では【計画】[04]と【状況内回想】[03]が共起しやすい。【自己記述】[07]も関わりがある。

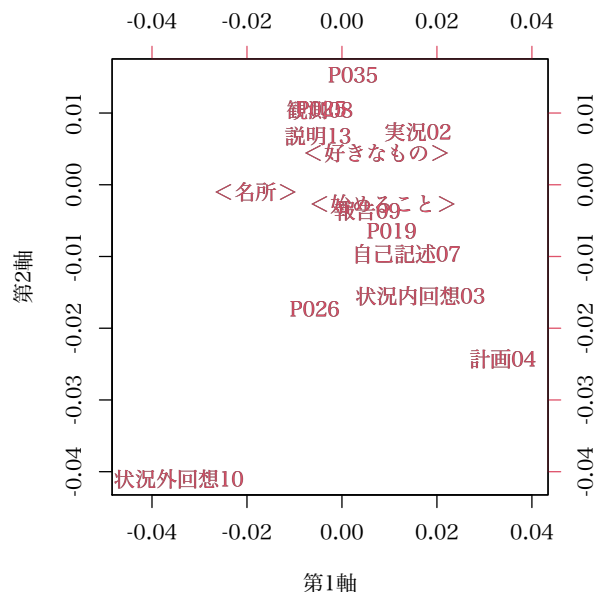


図2 「質疑応答」の修辞機能の多重化対応分析結果 (図ではテーマを略して<名所>のように表示)

図2の「質疑応答」パートでは、「話題提供」パートと比べて3つのテーマが近接しており、修辞機能との関係において各テーマが類似した傾向にあること、個々の話題にのみ関連の深い修辞機能は見られないこと、「話題提供」パートと同様に【説明】[13]がいずれのテーマにも近接していることが確認された。

このように、「質疑応答」パートより「話題提供」パートの方がテーマに依存した修辞機能の特徴がより現れやすいと言える。

4 考察

3節では、共想法による談話では【説明】[13]がベースとなっていることが確認できた。本節では、それ以外の修辞機能がテーマとどのように関わるかについて、「話題提供」パートを中心に確認する。

4.1 テーマ「好きなもの」

参加者が好きなものを紹介する際には、【自己記述】[07]と【観測】[08]が多く用いられている。以下に例を示す。

4) あの、このカメラはまだ買って半年ぐらいしかたっていないんです。

(発話機能：命題&時間要素：習慣・恒久&空間要素：状況内) → 【観測】[08]

5) もうそれも、年間2000枚ぐらい撮るんで、

(発話機能：命題&時間要素：習慣・恒久&空間要

素：参加] → 【自己記述】 [07]

6) 保存、整理が大変ですね。

〔発話機能：命題&時間要素：習慣・恒久&空間要素：状況外〕 → 【説明】 [13]

個人的な話題のため空間的距離が発話者に近く(空間要素「参加」)、なおかつ趣味・嗜好に関わる内容のため時間的距離に関わらない(時間要素「習慣・恒久」)性質が特定されたといえる。図1において【説明】 [13] に比べて距離が近いいため、好きなものを語る際には、そのものについて説明するより、自分とそのものの関わりを述べていることがうかがえる。

4.2 テーマ「近所の名所」

「近所の名所」というテーマでは、予測したように【説明】 [13] が他のテーマより多く用いられている他、【状況外回想】 [10] が多く、4名のうち3名の「話題提供」で出現している。1名は7)のように、撮影時の状況を述べているが、他の2名は8)9)10)のように歴史的な状況を含めて解説していた。名所という歴史的価値のあるものがテーマであるために、【状況外回想】 [10] が使用されたことがうかがえる。

7) 巫女さんがちょっと手伝って一緒に写させてくれました。

〔発話機能：命題&時間要素：過去&空間要素：状況外〕 → 【状況外回想】 [10]

8) この一、お坊さんの教育のための学校が、昔あったらしいんですね。

〔発話機能：命題&時間要素：過去&空間要素：状況外〕 → 【状況外回想】 [10]

9) お坊さんが、もう何十人ってというか、何百人もいたらしくて。

〔発話機能：命題&時間要素：過去&空間要素：状況外〕 → 【状況外回想】 [10]

10) それで、だから旃檀林という名前が付いているらしいです。

〔発話機能：命題&時間要素：習慣・恒久&空間要素：状況外〕 → 【説明】 [13]

4.3 テーマ「新しく始めること」

「新しく始めること」では、図1より【計画】 [04] が最も特徴的であるとされ、他の2つのテーマとは異なる様子が明らかになった。また、テーマが先の話題であるために出現を予測していなかった【状況

内回想】 [03] については、4名の参加者全員が用いていた。例えば「富士塚巡り」をしようとしている参加者の場合、次のように2年ほど前に神社で本を入手したことから述べている。

11) なかなかその、富士山が載ってる本はないんです。

〔発話機能：命題&時間要素：習慣・恒久&空間要素：状況外〕 → 【説明】 [13]

12) たまたまこれが見つかったんで、

〔発話機能：命題&時間要素：過去&空間要素：状況内〕 → 【状況内回想】 [03]

13) 全部行けるとこは行ってみたいなと思って、思ってます。

〔発話機能：命題&時間要素：過去&空間要素：状況外〕 → 【状況外回想】 [10]

14) それで、だから旃檀林という名前が付いているらしいです。

〔発話機能：命題&時間要素：未来意志的&空間要素：参加〕 → 【計画】 [04]

このように、新しく始めるにあたり、これまでの経緯を述べたりすでに開始していることを述べたりするために【状況内回想】 [03] が用いられることがわかった。ここから、「新しく始めること」というテーマは、必ずしも先のことのみでなく、さまざまな脱文脈化度の発話を生じさせることが可能なことがうかがえた。

5 おわりに

本発表では共想法のテーマに基づいて語られる談話について、テーマと修辞機能の関連を検討した。先行研究 [2, 3] では、設定されるテーマによって用いられる修辞機能に特徴が見られたが、参加メンバーのバランスが十分でなかったため、本発表では固定された参加メンバーによる整備されたデータを用いて、先行研究で示唆された傾向を再検証した。「話題提供」(独話)と「質疑応答」(会話)の分析から、両パートともテーマに共通する修辞機能【説明】 [13] があること、「話題提供」パートではテーマに特徴的な修辞機能が見られるが、こうした特徴は「質疑応答」パートではあまり見られないことが明らかになった。

今後は、今回分析したグループの12回分すべての談話を分析し、個人差なども考慮に入れてテーマと修辞機能との関係を詳細に検討する予定である。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP19K00588, JP18KT0035, JP20H05022, JP20H05574, JST 研究費 JPMJCR20G1, JPMJST2168, JPMJPF2101 の助成を受けたものです。共想法に参加頂いた方に感謝申し上げます。

参考文献

- [1] 大武美保子. 介護に役立つ共想法: 認知症の予防と回復のための新しいコミュニケーション. 中央法規出版, 2012.
- [2] 田中弥生・小磯花絵・大武美保子. 共想法談話の脱文脈化観点からの検討. 言語処理学会第 27 回年次大会発表論文集, pp. 569–573, 2021.
- [3] 田中弥生・小磯花絵・大武美保子. 脱文脈化の観点から見た共想法に基づく高齢者談話の分析. 国立国語研究所論集, Vol. 22, pp. 137–155, 2022.
- [4] 佐野大樹. 日本語における修辞ユニットの方法と手順 ver.0.1.1—選択体系機能言語理論 (システムック理論) における談話分析— (修辞機能編), 2010.
- [5] 佐野大樹・小磯花絵. 現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証—「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と脱文脈化言語・文脈化言語の関係—. 機能言語学研究, Vol. 6, pp. 59–81, 2011.
- [6] 田中弥生・佐尾ちとせ・宮城信. 児童作文の評価に向けた脱文脈化観点からの検討. 言語処理学会第 27 回年次大会発表論文集, pp. 750–755, 2021.
- [7] 田中弥生・浅原正幸・小磯花絵. 手順説明談話における脱文脈化の諸相. 言語処理学会第 26 回年次大会発表論文集, pp. 720–723, 2020.
- [8] 田中弥生・小磯花絵. 脱文脈化の観点からみる職場における取引先との談話の特徴. 言語資源活用ワークショップ発表論文集. 国立国語研究所, 2020.
- [9] Mihoko Otake-Matsuura, Seiki Tokunaga, Kumi Watanabe, Masato S. Abe, Takuya Sekiguchi, Hikaru Sugimoto, Taishiro Kishimoto, and Takashi Kudo. Cognitive intervention through photo-integrated conversation moderated by robots (picmor) program: A randomized controlled trial. *Frontiers in Robotics and AI*, Vol. 8, p. 54, 2021.